HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	経験の根源 ： トマス・アクィナスの形而上学［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	古舘, 恵介
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12380号
Issue Date	2016-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63424
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Keisuke_Furudate_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　古　舘　恵　介

主査　准教授　近　藤　智　彦
審査委員　副査　准教授　田　口　茂
副査　教　授　千　葉　惠
副査　教　授　上　枝　美　典（慶應義塾大学文学部）

学位論文題名
経験の根源――トマス・アクィナスの形而上学

トマス・アクィナスの esse および ens の概念の解明という本論文のテーマ自体はオーソドックスかつ伝統的なものと言えるが、その観点と方法の上での特筆すべき独自性としては次の二点が挙げられる。第一に挙げられるのは、本論文が、トマス・アクィナスの多くの著作の中で、『神学大全』や『ens と essentia について』のような既によく知られており研究も進んでいる主要著作を視野に収めつつも、まだ世界的にも十分に研究が進んでいない諸註解書を取り上げて中心的な研究対象としている点である。本論文は、厖大な諸註解書のラテン語テクストの読解を通して、トマス・アクィナスの esse および ens の概念の解明に資すると考えられる箇所を見つけ出した上で、そこにトマスの形而上学を解明する糸口を見出すことを試みている。第二に、本論文は、最新の二次文献や研究動向を追うことに汲々とする傾向が強くなりつつある哲学史研究の現状にあって、先行研究の扱いおよび研究史を踏まえての自らの解釈の位置づけの面でも異彩を放っている。すなわち、エティエンヌ・ジルソン、コルネリオ・ファブロなど前世紀を代表する往年のトマス・アクィナス研究にまで遡りつつ、ヨハネス・ロッツらによる「超越論的トミスム」と呼ばれる独特な解釈の流派にも学び、さらには日本の研究者の間で一定の注目を集めつつもほとんど真剣な検討の的となることのなかった長倉久子の異色の解釈をも手がかりにしている。その結果として、本論文は、近年の研究動向に照らして相当に独自の解釈の方向を打ち出している意欲的な研究となった。

トマス・アクィナスの esse および ens の概念に関する研究として、本論文ほどの規模のものは近年では世界的にも例を見ない。第 1 章は、先行研究の手堅いまとめとなっているが、それ以上に 20 世紀におけるトマス・アクィナスの研究史それ自体の研究としての価値も有している。例えば、伝統的にトマス・アクィナスの esse 概念が「存在」の意味で解されてきた背景に、スアレス流の創造論的 esse 解釈の影響があったと考えられるという指摘は、その興味深い成果の一つと言える。第 2 章以降の本論について、第一に評価すべき点は、トマス・アクィナス自身の見解が直接的に論じられているわけではない註解書というジャンルを資料として主に用い、その資料上の制約にも注意を払った上で、そこからトマス・アクィナス独自の哲学的主張を炙り出すことに一定の成功を収めていることである。そのために本論文では、ラテン語原典の緻密な読解を通してトマス・アクィナスのテクストに見られる微妙な論理の運びを析出することや、註解対象であるアリストテレスのテクストとの異同の検討を行うことなどの解釈の手法が駆使されている。第二に、こうした解釈を通して本論文が提示しているトマス・アクィナスの esse および ens の概念の内実自体も、その独自性を評価されるべきものとなっている。これは、超越論的トミスムや長倉久子らの先行研究を掘り起して新たに展開させるとともに、「存在」や「現実性」などの概念の一般的な理解に引きずられてきた従来の解釈をラディカルに批判したことによって得られた成果と言えよう。その結果、第 2 章では定動詞 est の根本性格を「概念無き述語づけ」として、第 3 章から第 5 章で現在分詞 ens の根本性格を「知性によって知られるもの」としてそれぞれ解釈することを通して、esse をめぐるトマス・アクィナスの形而上学を「人間の経験の根源を明らかにする学

問」とする独自の結論に到達している。

ただし審査の過程では、本論文の一部に、形式面で十分な説得力を欠く議論が見られること、また、可能な解釈の枚挙の点で不十分さが認められること（特に註解対象であるアリストテレスのテクスト自体の解釈に関して)、また、本論文全体の結論がトマス・アクィナスの esse 概念の解明に対してもつ含意については、さらなる明確化の余地があることなどが指摘された。しかし本論文が、すでに指摘したような資料上の制約と格闘しながら、一つの独自の解釈の筋道を果敢に提示し、今後の研究に一石を投じるものとなっていることは確かであり、上記の問題点もこうした本論文の意義自体を損なうものではないと判断された。なお、古舘氏によるトマス・アクィナスの研究は、日本における西洋中世哲学の全国学会である中世哲学会の機関誌『中世思想研究』に掲載されるなど、学界においても高い評価を得ており、特に本論文の第 2 章のもとになった部分はすでに、この分野の有力な学会である京大中世哲学会の機関誌『中世哲学研究（VERITAS)』に掲載されている。

以上を踏まえ、本審査委員会は、本論文に示された申請者の研究成果を高く評価し、全員一致で本論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。